髙橋義文名誉教授（元総合研究所所長）を偲んで
――巻頭言に代えて

菊地　順

個人的なことになりますが、コロナの猛威がなかなか収まらない初夏から盛夏にかけて、身内に二つの葬儀がありました。一つは地方で、一つは都内でした。ともに高齢による天寿を全うした生涯でしたが、そのとき、コロナ禍の中で行われた葬儀にあらためてコロナの現実を見せつけられた思いがしました。奥様より髙橋義文先生のご逝去のお知らせをいただいたのは、ちょうどそうした折でした。

髙橋先生が闘病生活を送られていたことは存じ上げていましたが、この夏にお亡くなりになるとは夢想だにもしていませんでした。この四月には、三月末に出版した拙著をお送りしたところ、丁寧なお礼のメールをいただいていました。そして、その最後のところには、「その後、抗がん剤治療を続けています。末期がんの告知を受けてから一年がすぎ、徐々に体の重さが増してきました。これまで支えられてきたことに感謝しつつ、あとは神様にお委ねして、と思っています。現在のところ、六、七割のＱＯＬが維持されているのはありがたいことだと思っています」と記されていました。

そのため、体調は持ち直しておられるものとばかり思っていました。しかし、七八歳の誕生日を迎えられる少し前の八月二九日に、神は愛する髙橋義文先生を天に召されたのです。

髙橋先生は一九四三年九月に東京にお生まれになり、長じてセブンスデー・アドベンチストの信仰を持たれ、日本三育学院神学校、米国のローマリンダ大学（神学科）、アンドリューズ大学大学院（修士課程）で学ばれました。アンドリューズ大学大学院では、ラインホールド・ニーバーの『人間の本性』に基づいて修士論文を書かれ、帰国後は東京神学大学大学院で大木英夫教授の指導の下、ニーバー研究を継続されました。そして一九九一年に学位論文をまとめられ、それは一九九三年に『ラインホールド・ニーバーの歴史神学――ニーバー神学の形成背景・諸相・特質の研究』（聖学院大学出版会）として結実しました。

髙橋先生はその後、三育学院短期大学で教鞭をとられ、また学長の重職を務められました。そして二〇〇六年から聖学院大学総合研究所で教鞭をとられ、二〇〇九年からは同大学院教授に、また一三年からは研究科長および総合研究所所長に就任されました。その間、学生の指導の傍ら、ニーバー研究に精力的に取り組まれ、また大学院と研究所の発展のためにご尽力くださいました。その研究成果は、聖学院大学研究叢書第8巻『ニーバーとリベラリズム――ラインホールド・ニーバーの神学的視点の探求』（二〇一四年）としてまとめられ、またニーバーの伝記や主著の翻訳においても大いに貢献されました。主な翻訳としてはチャールズ・C・ブラウン著『ニーバーとその時代』（二〇〇四年）やニーバー著『人間の運命』（髙橋義文・柳田洋夫共訳、二〇一七年）、同『人間の本性』（同、二〇一九年）（以上、聖学院大学出版会）などがあります。

またこうしたアカデミックな活動以外でも、一人の牧師として絶えず伝道に心を用いられ、主に学

校で伝道に携わる者たちによって作られた「学校伝道研究会」でも大いに活躍され、その会長も務められました。「学校伝道研究会」では、その成果を書物にまとめて出版することになりましたが（最終的に三冊、聖学院大学出版会刊）、その時も会長として精力的に取り組まれたことが思い出されます。

ラインホールド・ニーバーは深い人間理解に基づいて現実の諸問題に取り組んだ現実主義的な神学者であったと言えますが、その姿勢は髙橋先生にも引き継がれていたのではないかと思います。いろいろな会で髙橋先生とご一緒させていただく機会がありましたが、先生はいつも冷静沈着で、感情的になることはなく、しかし深い情熱を秘めた、どちらかというと理詰めの人で、堅実に歩みを進められる人であったと思います。先生の最後の研究発表は、たぶんお辞めになる年に行われた総合研究所のラインホールド・ニーバー研究会であったかと思いますが、そのとき先生はジェイムズ・H・コーンの『十字架とリンチの木』を取り上げ、そこで展開されているコーンの一方的なニーバー批判を、一つひとつ丁寧に根拠を示しながら覆していき、それを逆批判していきました。そこには、ニーバーに向けられた不当とも言える批判に対する密かな憤りと、また先生のニーバー愛が、いかんなく発揮されたご発表であったかと思います。

先生は、ニーバー研究の二番目の著書『ニーバーとリベラリズム』の「あとがき」の最後で、ニーバーが言及した一つの讃美歌を紹介し、結びの言葉をつづっています。それは、以下のような文章です。

一九六三年、冷戦下、米ソ間の核兵器増強競争がほんのわずかだが緩和の兆しを見せた

とき、それに関連して、ニーバーが、ニューマン枢機卿の讃美歌「妙なる道しるべの光よ」の一節を添えて、こう述べたことがあった。

われわれは将来を予告することができないゆえに、たとえ不確かであるとしても、希望の持てる最初の一歩を踏み出さなければならない……。

「ゆくすえ遠く見るを願わじ……ひとあし、またひとあし、道をば示したまえ」

ジョン・ヘンリー・ニューマン（『讃美歌』二八八番、一部漢字に変更）

歴史の現実を踏まえつつ希望を語る――今の時代へのニーバーらしい示唆であるように思われる。

ニーバーは一九七一年に七八歳と一一か月余りの生涯を閉じましたが、その晩年に向かう日々も、アメリカは国の内外に大きな問題を抱えていました（外にあっては米ソ冷戦、ベトナム戦争、内にあっては人種問題等）。またニーバー自身六〇歳を迎える一九五二年に脳梗塞を患い、晩年は不自由な生活を余儀なくされました。しかし、ニーバーはなお、「ゆくすえ遠く見るを願わじ……ひとあし、またひとあし、道をば示したまえ」と祈り、賛美したのです。この年（一九六三年）は、公民権運動のクライマックスともなったワシントン大行進が行われ、マーティン・ルーサー・キング牧師が「わたしには夢がある」と語った年でもありましたが、激動するアメリカ社会を目の当たりにしながら、

なおニーバーは神のゆるぎない導きのみ手を仰ぎ見たのです。そして、その神のみ手にアメリカの将来を、また世界の将来を、そして自らの人生を委ねたのです。髙橋先生は、それを「歴史の現実を踏まえつつ希望を語る」ことと表現しました。そして、そこにニーバーのいわば遺言を聞き取ったのです。しかし、それはまた、髙橋先生ご自身の遺言とも言えるのではないでしょうか。先ほど紹介したメールの中で、髙橋先生は、「これまで支えられてきたことに感謝しつつ、あとは神様にお委ねして、と思っています」と語られていました。現実を深く見据えながら、最後まで神に委ねる希望に生きられたのではないかと思います。そして、奇しくもニーバーとほぼ同じ年齢で、その生涯を閉じられたのです。ここに先生のご生涯を偲ぶとともに、そのみ跡にわたしたちも従っていきたいと希求するものであります。

二〇二一年一〇月三一日

宗教改革記念日（聖学院大学創立三三周年記念日）に